●ジェンツーペンギン

頭の上に白いリボンのような模様があり、オレンジ色のくちばしをしたおしゃれなペンギンが、ジェンツーペンギンです。南極大陸周辺と亜南極圏の島々に分布し、体長約75cm、体重約6kgになります。このペンギンが生息するフォークランド諸島では、インド人のことを「ジェンツー」と呼び、頭部の白い模様がインド人の「ターバン」に似ていることから名づけられたと言われています。とても好奇心が強く、お客様のいるガラス面にチョコチョコと近づいて行き、お客様の指の動きにあわせて首をふったり、お客様の後を追って行ったりと、ひょうきんなところを見せてくれますが、係員が掃除をしている時には、くちばしでホースをひっぱるなどイタズラ好きな面も見せてくれます。給餌の時には、自分の順番がまわってくるまで待ちきれずに、大きなオウサマペンギンの脇をすりぬけ、バケツから餌を横取りしたり、マカロニペンギンの巣から巣材の石を運び出し、自分の物にしてしまうなど、ちゃっかりしているところもあります。また、ペンギンの中では最も速く泳ぐと言われ、「ペンギンズネイチャー」でも、イルカのように水上にとび出して泳ぐ、「イルカ泳ぎ」や、水中から直接、陸地にとび上がる行動を観察することができます。このように愛らしく、活発に動きまわるジェンツーペンギン、いつの日か、親子ならんでかけまわる姿を見ることができるよう願っています。　　（蛭田）

▲ジェンツーペンギン　*Pygoscelis papua*

●ネコザメ

ネコザメは、千葉県沿岸から東シナ海に分布し、岩場や藻場の海底に生息する、体長1m前後のおだやかな性格をした小型のサメです。サメというと、鼻先が突き出て、大きな鋭い歯をもった、映画で有名な「ジョーズ」の顔を連想しますが、このサメは頭が丸く、鼻部は平坦で頬がはり出し、「ネコ」の顔に似ています。このためこのサメには、「ネコザメ」という名がつけられています。歯の形も他のサメの仲間とはちがった特徴をもち、奥歯が「ウス」のような形をしています。この奥歯でサザエなどの貝類や甲殻類のかたい殻をかみくだいて、中身だけを食べることから、地元の漁師の間では、「サザエワリ」とも呼ばれています。この頭部の形態と歯の特徴が、古代に栄えた種類と似ており、原始的なサメの生き残りである、「生きた化石」と考えられています。活発に泳ぎまわることは少なく、水槽のガラス面側の隅で、数匹がかたまって、寄りそうようにじっとしていることが多いので、よく姿を見ることができ、また、サメのイメージとはかけ離れた愛きょうのある顔つきをしていることから、お客様に人気のある魚のひとつとなっています。このように動きの少ない魚ですが、給餌の時間になると係員のまわりに集まって来て、時には水面から顔を出し、餌をねだることもあり、とても人なつっこく、かわいらしいサメですので、飼育係に人気の高い魚となっています。　　（ハッ木）

▲ネコザメ　*Heterodontus japonicus*

さかまた　No.48　（禁無断転載）

編集・発行　鴨川シーワールド

〒296 千葉県鴨川市東町1464－18

☎(0470)92-2121

発行日　平成8年12月

さかまた

鴨川シーワールド　NO.48

海獣診療センター

Dolphin & Seal Clinic

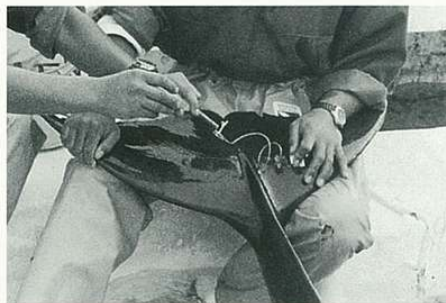
イルカのお医者さん

〜海の動物達とのつき合い〜

水族館には本当はいないほうがいい人、それは「獣医」です。動物が健康ならば、お医者さんはいりません。でも実際には動物は病気にかかることがありますから、お医者さんは必要なのです。このお医者さんの役目をはたしているのが、水族館の「獣医」です。

シーワールドのお医者さんは、白衣を着て診療所の中で仕事をしているだけではありません。動物に餌を与えるなどの飼育作業を行うことにより、動物の状況や餌の鮮度、気温や水温などを実感としてとらえることができるので、動物とふれあうことはとても大切なことなのです。そのため、当館のお医者さんは、健康管理者と飼育係の二役をこなしています。

健康管理は人間関係

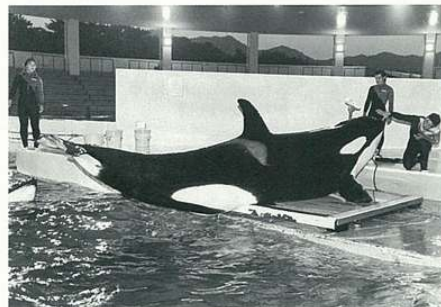
とは言っても、動物のことを一番よく知っているのは、いつも身近にいる飼育担当者で、母親がわりと言ってもよいでしょう。何となく変だ、いつもと様子が違う、という観察が異常の第一発見です。担当者が「あれっ？」と、わずかな変化に気づくことが健康管理には最も大切なことです。

▲受診動作により、血液検査も簡単に

自分の直感が頼りになるには何年かの経験が必要と思いますが、ベテランになると、「あれっ」と思った動物の行動や態度が、またあらわれてくるのか、どのように変化するのかを、よく見守っていてくれます。そして、観察だけではよくわからないことをより詳しく調べるために、血液検査や細菌検査、その他の検査を行うのです。このような動物の健康状態に関する情報を、いつでも飼育担当者と伝えあうことが必要で、人と動物との関係はもちろんですが、人と人とのかかわりも大切なのです。

海獣のお医者さんはホームドクター

診察や治療は、診療センターのような室内で行うことはほとんどありません。水中に生活する動物達ですから、採血や治療といった医療行為のほとんどすべてが、飼育舎やプールサイドなど、彼らの「家」で行われます。

水族館のお医者さんは、子供の頃からかかりつけのホームドクターといったところで、シャチの「ビンゴ」はお腹をこわしやすいとか、バンドウイルカの「アム」はがんばり屋だから、といったようにそれぞれの特徴や性格も知っています。シーワールド生まれの動物とは、生まれた時からだけでなく、母親のお腹の中にいる時からのつき合いなのです。

診療センターには、検査のためのレントゲン装置や胃カメラなどの医療器具も備わっていますが、これらの出番はさほど多くありません。最も

▲シャチの体重測定

一般的な治療は、飲み薬を与えるといった内科的なもので、イルカもアシカもペンギンも餌の魚をかまずに丸飲みにするので、薬を餌の中につめて与えれば、餌と一緒に胃の中に直行です。ところがこの方法は、餌をかみちぎって食べるラッコには通用しません。このように、それぞれの動物によって、多少異なる習性や特徴があるので、その動物にあった方法が考えられています。様々な工夫が必要なところが、この仕事のおもしろいところでもあります。

受診動作はすばらしい

体温測定、採血、体重測定、注射などを行うために、数年前まではプールを落水したり、網でイルカをつかまえたりしていました。しかし、この方法は、時間がかかるばかりでなく、動物にとっては、ストレスの多いでき事であり、係員にとっては危険をともなう作業でもあります。ところが受診動作、すなわち、受診のために定まった姿勢をたもち続けることを教えることで、この作業を行うことなく、係員にも動物にも安全かつ短時間に色々なことができるようになりました。注射針を刺されてもじっとしている、直腸温を測る体温

▲体重測定も健康管理には大切

▲体表のチェック

測定時も動かない、体重計に自分で乗りじっとしているというように、教えるときちんとその姿勢をとってくれています。

これらの受診動作は、担当者と動物との信頼関係があってこそできるもので、病気の発見が早くなり、健康管理に大いに役立っています。また、動物にストレスを与えずに様々なデータを得ることができ、自然界では行うことのできない貴重な研究にも結びついています。

いつも笑顔で

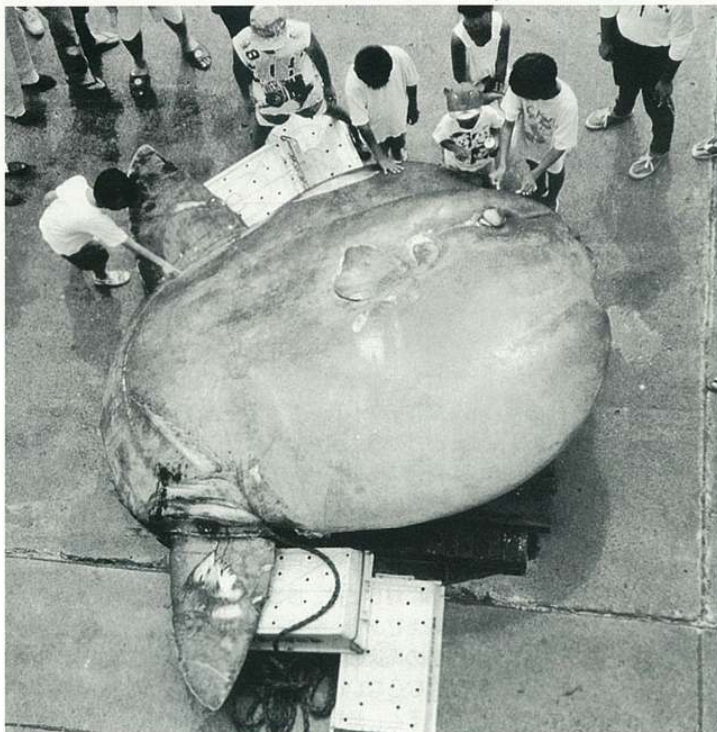
園内を歩く時は笑顔が大切です。もちろんお客様に対しては、接客業にたずさわる者としての心構えであり、それと同時に、園内で働いている大勢の係員のためにも、お医者さんの笑顔は忘れてはならないのです。お医者さんがしかめ面をしていると、動物の具合がよっぽど悪いのだと心配の種をまいてしまうこともあるのです。

シャチの繁殖行動をカメラにおさめようと、大急ぎでプールまで走って行った時には、動物の繁殖というこの上ない楽しみに、ついこの心構えを忘れてしまい、さっそく「シャチに何かあったの？」と心配そうに聞かれてしまいました。

体の調子が悪い動物を見る時には、生と死の2文字が常に頭の中にあります。これは、飼育にたずさわっている者、生命にかかわっている者の宿命でもあります。動物とのつき合い、誕生、そして死から得たことを、次に生かして、よりよい飼育方法や、新しい技術をめざしてゆく、これが動物とのふれあいを大切に仕事をしている者にとってのだいご味であり、楽しさです。

勝俣悦

トピックス

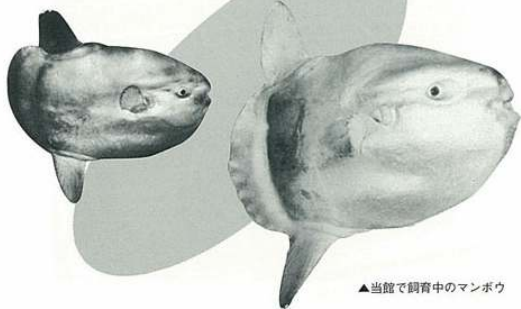
定置網に巨大マンボウ!!

▲8月16日に捕獲された個体（全長：272cm、体重：2.3t、性別：メス）

今年の8月中旬に、鴨川沖にある定置網で、全長2m以上のジャンボサイズのマンボウが9匹、相次いで捕獲され、中には全長3m、体重2トンをこえるものもありました。マンボウは、一般的には、毎年秋から春にかけて房総半島近海に回遊してくるので、当館ではこの時期に、体長50～90cmの飼育に適した個体を、定置網より搬入して飼育をしています。しかし、真夏にマンボウが定置網に入ることはまれで、このように大きな個体が捕獲されたのは、ここ10数年の間では記録がないほど、大変めずらしく、漁業関係者も驚いていました。今回のマンボウは、その大きさだけでなく、これまでに見た個体とは、体色や形態が異なっていました。体色は全体的に褐色を帯び、体側はより起伏が大きくなっています。また、頭部が上方へはり出し、吻部はつぶれて、吻端は丸味を帯びずに平坦な形をしています。マンボウについての研究は、ほとんどなされていないため、これらの違いが成長段階や性別、あるいは個体群や分類学上のものなのかは現在のところ、全く不明です。また、海流や水温などの生息環境や回遊経路についても謎につつまれているため、今回の巨大マンボウの出現については、わからないことばかりです。

鴨川市では、市制施行25周年事業の一環として、市民より「市の魚」を公募したところ、マンボウが選ばれましたので、鴨川市にとってもマンボウは大切な魚となりました。シーワールドでは、この謎の多い魚であるマンボウの飼育を通して、その謎を少しでも解明していきたいと思っています。

森

▲当館で飼育中のマンボウ

▲出産直後の「ヘレン」親子、お客様の声援をあびて

初体験 “イルカの出産シーン”

▲2頭でなかよくジャンプ!!

バンドウイルカの「ヘレン」と「ノーマ」が7月27日と8月10日、約12ケ月の妊娠期間を経て、相次いで出産をしました。ヘレンは2度目、ノーマは3度目で、どちらもベテランママです。当館ではこれまでに何頭ものイルカが出産していますが、私が出産シーンに立ち会うことができたのは今回のノーマが初めてでした。

午前7時48分、ノーマの生殖孔から子イルカの尾鰭が出ているのを発見してから、見守ること1時間半。時々苦しそうに体をくねらすノーマ。そして、思わず「ガンバレ！」の声をかける係員の目にとびこんできたちっちゃな赤ちゃん。「生まれた！」赤ちゃんイルカはフラフラしながらも、ヨレヨレの尾鰭を力いっぱい動かして、初めての呼吸をしました。偶然いあわせたラッキーなお客様からの「おめでとう!!」の声を受けながら、ちょっぴり色白でノーマによく似た赤ちゃんは、お母さんにピッタリついて、ぎこちなくも一生懸命泳ぎはじめました。

▲母親にピッタリとつく「ヘレン」の子、後方中央は、3年前に生まれた「カリス」

さて、そんなちっちゃな2頭の赤ちゃん。今では、だいぶイルカらしく（?）なり、おっぱいをたくさん飲んですくすくと育ち、元気そのものです。お母さんが食べている餌に興味を示したり、ジャンプをしてみたり、時には子イルカ同士で遊んでみたりとこれからのやんちゃぶりが目に浮かびます。

この出産を通じ、母親の偉大さ、子イルカの強さをあらためて感じました。シーワールド生まれのこの2頭の子イルカが元気に育つことを祈っています。

阪田

●インターネットホームページ開設

7月20日、鴨川シーワールドはインターネットホームページを開設しました。ホームページは、園内やショーの案内など、多くの写真を用いたビジュアルな内容で、パソコンの画面を通じて、当館のすばらしさを楽しんでいただけます。また、水生生物に関するクイズのコーナーでは、全問正解すると、プレゼントに応募することができ、シャチのジャンプシーンも見ることができます。アクセスには、Netscape Navigator ver2.0x以上とshockwave のプラグインが必要ですが、インターネットに接続されている方は、ぜひ一度ご覧になってみて下さい。
アドレス：http://www.mitsuikanko.co.jp/kamogawaseaworld

岡村潤

●新オリジナルグッズ発売

1990年、シンボルキャラクターである、「オルタン」が誕生して以来、ベルーガの「シルキー」、セイウチの「ロッキー」、マンボウの「モラン」、オウサマペンギンの「ピンキー」がオリジナル商品としてデビューしてきました。今回、これらのキャラクターの個性をさらに生かそうとデザインの検討を行った結果、キャラクター達が、サッカー、アメリカンフットボール、テニス、水上スキー、カヌーなどの人気スポーツの名選手となった新デザインが誕生しました。これらの新デザインの他にキャラクター全員で結成された、ロックバンドの「ROMPS」も加わったＴシャツとテレフォンカードが、現在、人気を集めています。

吉　野

●水族館よくばり体験ファミリー

小学生とその家族を対象とした「水族館よくばり体験ファミリー」が、今年の夏に初めて開催されました。このイベントは、当館ならではの様々な体験をすることができ、1泊2日の日程で、5家族14名の方が参加されました。1日目は、展示水槽の裏側や沪過槽、機械室などの施設見学、イルカのトレーナー体験、魚類の給餌や水槽掃除などの飼育係体験と夜の水族館探検。2日目は、早朝からの魚市場見学、磯のタイドプールでの生物採集とその検索など、もりだくさんの内容で、子供達だけでなくお母さん達も大はしゃぎ。家族ですごしたこの感動のひとときは、参加された方々にとって、夏休みのよい想い出となったことと思います。

佐　伯

●日米シーワールドの技術交流

当館とアメリカのシーワールドとは、1985年以来、姉妹水族館の関係を結んでいます。そして今までに動物交換や技術的交流を行っておりますが、このたび、9月4日から8日までの間、アメリカ・シーワールドの動物訓練部長である、サド・ラシナック氏が当館に滞在され、当館スタッフとの技術交流が行われました。滞在中は、連日、現場での意見交換やミーティングが持たれ、アメリカにおける最新の動物訓練理論と実践方法について学ぶことができ、改めて基本の大切さが認識されました。動物の訓練というテーマに絞った今回の技術交流は、大変有意義なものとなり、アメリカ・シーワールドとの友好関係をさらに発展させることができました。

勝俣浩